

一般演題（ポスター）

■ 2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ■ ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-143-B]

薬局薬剤師における新人研修受講と職務上の障壁との関連：横断研究

○野口 鈴華¹（株）なの花西日本 なの花薬局 豊中店）

[P-146-B]

薬局薬剤師を対象としたコミュニケーションや患者心理に関する調査～患者に寄り添う薬剤師になるために～

○小倉 未来¹, 佐野 智也², 阿部 真也³, 竹平 理恵子⁴, 有田 悦子⁴ (1.くすりの福太郎 緑が丘店, 2.（株）くすりの福太郎, 3.（株）ツルハ, 4.北里大学 薬学部)

[P-149-B]

対人業務推進におけるRMP活用を目指した症例検討会の評価および意識調査

○今井 真穂¹, 大貫 ミチ², 村上 篤史³, 福田 達也³, 谷合 英太郎⁴, 吉住 和樹⁴, 倉田 香織⁵, 上田 昌宏⁶ (1.薬樹（株）薬樹薬局 ライフ溝口店, 2.宮前平2号店, 3.神奈川グループ, 4.情報本部システムグループ, 5.東京薬科大学 薬学部, 6.摂南大学 薬学部)

[P-152-B]

保険薬局における腎機能評価フィードバック活動の実施とその効果― 薬剤師へのアンケート調査による行動変容と課題

○松本 優太¹, 菅 美佳², 田辺 憲人², 正岡 亜弥子², 水口 祐人², 宗像 宏友², 新田 昌稔², 上田 奈津美², 松磨 和樹², 宮田 昌英², 鳥井原 彩香², 稲邊 慎也², 山下 冬馬², 高橋 渉² (1.クオール（株）クオール薬局取手店, 2.クオール（株）)

[P-155-B]

薬局薬剤師を対象とした処方提案技能向上にむけた研修効果 トレーシングレポート件数の変化とSCAT分析による行動変容要素の探索

○板野 円香¹, 宮本 啓悟¹, 藤井 美枝¹, 丸山 仁美¹, 今野 有彩¹, 宇野 智哉¹, 野見 真人¹, 浜口 健斗¹, 東尾 健太郎¹, 宮里 由貴子¹, 橋本 良太², 松浦 正佳², 岩城 正宏³ (1.（株）サエラ 学会発表に関する研究会, 2.学術教育部, 3.サエラ研究所)

[P-158-B]

薬剤師国家試験を基にした「薬局実務実習用アプリ」の開発と実習生への意識調査（第2報）

○田中 直哉^{1,2}, 近藤 澄子² (1.（株）ピノキオファルマ, 2.（株）ピノキオ薬局)

[P-161-B]

認知行動療法的アプローチによる服薬支援オンライン型研修プログラムの開発～RIASによるコミュニケーション分析～

○田沼 和紀^{1,2}, 前田 初代^{2,3}, 原 和夫⁴, 高橋 憲二^{3,5}, 渡邊 文之^{2,3} (1.（株）カメガヤ（フィットケアデポ）, 2.CBT-A服薬支援研究会, 3.日本大学薬学部, 4.（株）わかば, 5.松戸市立総合医療センター)

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-143-B] 薬局薬剤師における新人研修受講と職務上の障壁との関連：横断研究

○野口 鈴華（（株）なの花西日本 なの花薬局 豊中店）

【目的】新人薬剤師においては能力と求められる業務にギャップがあるとされており，卒業後も様々な研修が実施されている．本研究の目的は新人研修と実務上の障壁の関連を明らかにすることである．

【方法】2025年1月16日～2月13日に，保険薬局店舗に勤務する薬剤師を対象に質問紙調査を実施した．主要評価項目は業務上の障壁の有無，副次評価項目は最も障壁を感じた業務，障壁の業務別詳細とし，数(割合)で記述した．新人研修受講経験と業務上の障壁の有無の関連の評価のため，性別，薬局勤務年数，病院勤務経験，OJTトレーナー経験を調整してロジスティック回帰分析を行った．

【結果】調査対象薬剤師322人のうち46.6%が解析対象となった．解析対象者背景は男性24.0%，薬局勤務年数中央値7年[四分位範囲3-18]，新人研修受講経験ありは50.7%であった．主要評価項目である障壁を感じた経験ありが64.7%，最も障壁を感じた業務は薬学的な専門知識46.7%，薬学的な専門知識以外の患者対応方法26.7%，コミュニケーション16.0%であった．薬学的な専門知識の中で最も大きな障壁を感じた業務プロセスは薬剤管理指導51.3%で，中でも「小児の散剤の味・におい・服用方法」が44.0%で最も多かった．ロジスティック回帰分析の結果，新人研修受講の経験と業務上の障壁の有無には有意な関連は認められなかった（オッズ比0.75, 95%信頼区間0.2-2.3, $p=0.618$ ）．

【考察】薬局薬剤師の65%が業務上の障壁を経験し，特に薬学的専門知識，薬剤管理指導，小児の散剤の味・におい・服用方法の指導に困難を感じていた．一方で，新人研修受講と障壁の経験には有意な関連がなく，現行の研修と実務のニーズに乖離があることがわかった．新人研修プログラムには，専門知識に加え，患者対応やコミュニケーションスキルの強化も必要かもしれない．

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ⑤ ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-146-B] 薬局薬剤師を対象としたコミュニケーションや患者心理に関する調査～患者に寄り添う薬剤師になるために～

○小倉 未来¹, 佐野 智也², 阿部 真也³, 竹平 理恵子⁴, 有田 悦子⁴ (1.くすりの福太郎 緑が丘店, 2. (株) くすりの福太郎, 3. (株) ツルハ, 4.北里大学 薬学部)

【目的】薬局薬剤師には、服薬指導において患者の心情に寄り添った対応が求められており、コミュニケーションは重要となる。本研究は、コミュニケーションや患者心理の基本的知識について学んだ時期等について調査することで、今後の薬剤師教育の一助とすることを目的とした。

【方法】2024年9月12日～29日に薬局薬剤師209名を対象としたWebアンケート調査を実施した。調査項目は、薬剤師がコミュニケーションについて学んだ経験、学んだ時期、傾聴、受容、共感、行動変容のステージモデル、死の受容5段階への理解度等とした。学んだ時期は、薬剤師の最終学歴ごとに集計した。

【結果】回答が得られた96名（45.9%）は、4年制卒44名、6年制卒51名、大学院修了1名だった。56名（58.3%）にコミュニケーションを学んだ経験があり、複数回答で得られた学んだ時期は4年制卒（n=22）で大学生時代4名、就職後19名、6年制卒（n=33）で大学生時代29名、就職後13名、大学院修了（n=1）で就職後1名だった。理解度について、「内容を説明できる」と回答した者は、傾聴47名（49.0%）、受容33名（34.4%）、共感64名（66.7%）、行動変容のステージモデル5名（5.2%）、死の受容5段階12名（12.5%）だった。

【考察】4年制卒と比較して、6年制卒がコミュニケーションを学んだ時期は主に大学生時代だったことから、6年制教育において対人に関する教育が強化されたことが影響したと考えられる。また、患者とのコミュニケーションや患者心理に関する知識では、傾聴、受容、共感の理解度は高い傾向にある一方、行動変容のステージモデルや死の受容5段階の理解度は低い傾向にあった。以上より、大学で教育を受けていても臨床実践に繋がる理解を深めることは難しい現状が示唆され、就職後もコミュニケーションや患者心理を学ぶ機会を提供し、アクティブラーニング等薬剤師が活用可能な知識や技能を学べるよう工夫が必要だと考えられる。

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ⑤ ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-149-B] 対人業務推進におけるRMP活用を目指した症例検討会の評価および意識調査

○今井 真穂¹, 大貫 ミチ², 村上 篤史³, 福田 達也³, 谷合 英太郎⁴, 吉住 和樹⁴, 倉田 香織⁵, 上田 昌宏⁶ (1.薬樹(株) 薬樹薬局 ライフ溝口店, 2.宮前平2号店, 3.神奈川グループ, 4.情報本部システムグループ, 5.東京薬科大学 薬学部, 6.摂南大学 薬学部)

【目的】RMPの活用は対人業務の質向上につながるため、社内研修の一環として、薬局薬剤師を対象としたRMP活用を想定した症例検討会を実施した。RMPに対する意識調査および検討会の効果を検証するために、検討会前後でアンケート調査を行った。

【方法】2025年4月16日と19日に90分の症例検討会をzoomで行い、症例に対しRMPの活用方法を検討する内容とした。アンケート調査は、社内限定公開のGoogle Formsにより行った。RMPに対する意識について、5件法（プレ「自信がない～自信がある」、ポスト「変わらない～自信がついた」）で回答する内容として単純集計を行った。RMPの理解について、プレポストが同一設問の4件法（「1.知らない、2.知っているけど説明できない、3.自信はないけど説明できる、4.説明できる」）とし、ウィルコクソンの符号順位検定で解析した。両アンケートに回答した場合を有効回答とした。

【結果】参加者は19名（有効回答17名）であった。RMPの意識について1,2（低度）、3（中度）、4,5（高度）の3群にて分類した。人数の割合は、「患者向け資材の説明への自信」プレ（低度：29.4%, 中度：35.3%, 高度：35.3%）、ポスト（0%, 5.9%, 94.1%）、であった。RMPの理解について、「“本文・医療従事者向け資材・患者向け資材”の説明ができるか」（平均値プレ1.94, ポスト3.35, $p<0.001$ ）、「“重要な特定されたリスク・重要な潜在的なリスク・重要な不足情報”の説明ができるか」（1.71, 3.24, $p<0.001$ ）であった。

【考察】研修後のアンケートから、資材を用いた説明に対する自信がついており、意識が向上したものと考えられる。また、RMPの理解について、リスク分類や資材に関する設問が統計的に有意に向上していた。以上から症例検討会は効果的だったと考えられる。一方で、参加直後のアンケートであったため、受講後のRMP活用状況について確認できていない。

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-152-B] 保険薬局における腎機能評価フィードバック活動の実施とその効果― 薬剤師へのアンケート調査による行動変容と課題

○松本 優太¹, 菅 美佳², 田辺 憲人², 正岡 亜弥子², 水口 祐人², 宗像 宏友², 新田 昌稔², 上田 奈津美², 松磨 和樹², 宮田 昌英², 鳥井原 彩香², 稲邊 慎也², 山下 冬馬², 高橋 渉² (1.クオール（株） クオール薬局取手店, 2.クオール（株）)

【目的】慢性腎臓病（CKD）患者に対する腎排泄型薬剤の適正使用は、保険薬局においても重要な課題である。そこで当薬局グループでは、2024年10月～11月に、腎機能低下が疑われる患者に対して腎機能低下時に用量調整が必要な薬剤が通常量で調剤された事例を抽出し、各薬局に個別フィードバックを実施した。本研究は、この活動が薬剤師の腎機能評価に対する意識や行動に与える影響、および今後の課題や研修ニーズを明らかにすることを目的とする。

【方法】フィードバック対象となった薬局に勤務する薬剤師を対象に、Web形式（Microsoft Forms）によるアンケート調査を実施した。設問には、腎機能評価に関する意識変化や実施状況、処方内容の変更に関して医師と相談した経験、日常業務上の課題、ならびに研修の必要性などを含めた。

【結果】回答者146名のうち、腎機能評価の重要性に対する意識が「向上した」と答えた薬剤師は97名（66.4%）であった。行動面では、腎機能評価の実施頻度が「増えた」「どちらかという増えた」と答えた者は69名（47.2%）であり、45名（30.8%）が処方内容の変更を医師に相談した経験があった。一方、腎機能評価においては「検査値の入手困難」が最大の課題として挙げられ（71名、48.6%）、研修の必要性については120名（82.2%）が「必要」と回答した。

【考察】本取り組みにより、薬剤師の腎機能評価に対する意識は一定程度向上したが、行動変化は限定的であった。検査値の入手困難などの実務上の障壁が行動の定着を妨げている可能性があり、今後は支援体制の整備と継続的な研修の提供が求められる。なお、本研究はアンケート調査に基づくものであり、回答は薬剤師自身の主観に依存している点や、回答者に偏り（選択バイアス）がある可能性を考慮する必要がある。

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-155-B] 薬局薬剤師を対象とした処方提案技能向上にむけた研修効果 トレーシングレポート件数の変化とSCAT分析による行動変容要素の探索

○板野 円香¹, 宮本 啓悟¹, 藤井 美枝¹, 丸山 仁美¹, 今野 有彩¹, 宇野 智哉¹, 野見 真人¹, 浜口 健斗¹, 東尾 健太郎¹, 宮里 由貴子¹, 橋本 良太², 松浦 正佳², 岩城 正宏³ (1. (株) サエラ 学会発表に関する研究会, 2. 学術教育部, 3. サエラ研究所)

【目的】 薬局薬剤師による処方提案の質向上には医薬品情報の適切な活用が不可欠である。本研究では、医薬品情報活用と処方提案スキル向上を目的とした社内研修の効果をトレーシングレポート（TR）報告件数および質的分析から検証した。

【方法】 薬局薬剤師を対象に医薬品情報活用に関する3回の社内研修を実施し、受講前後のTR報告件数と情報源活用状況を調査した。TR件数の変化はWilcoxon符号付順位検定で、研修後TR件数への影響因子は負の二項回帰分析で評価した。また、自由記述回答をSCAT（Steps for Coding and Theorization）により質的に分析した。

【結果】 解析対象14名（回収率37.8%）のうち、半数以上が「研修後に情報源活用回数が増えた」と回答したが、TR報告件数に有意な変化はなかった（30→27件、 $p=0.83$ ）。負の二項回帰分析では、医薬品リスク管理計画（RMP）やインタビューフォーム（IF）の活用がTR件数増加と関連する傾向を示したものの、統計的有意差は認められなかった（主要因子：RMP使用 $\beta=0.544$, $p=0.35$ ）。SCAT分析からは、情報源の適切な使い分け、統計的思考、および実践知の習得が行動変容に必要な要素として抽出された。

【考察】 TR報告件数に有意な変化は見られなかったものの、初学者への教育効果と情報源活用の重要性が示唆された。特にRMPやIFの活用が処方提案行動を促進する可能性が示されたが、サンプル数の制約から統計的有意差は確認できなかった。質的分析からは、医薬品情報を臨床判断へと結びつけるには、批判的吟味能力と情報の再構成力が重要であることが明らかになった。本研究の限界として少数例での検討であることが挙げられる。今後は対象者数を増やし、TR件数だけでなく処方提案の質や臨床アウトカムを含めた多角的な評価が必要である。

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-158-B] 薬剤師国家試験を基にした「薬局実務実習用アプリ」の開発と実習生への意識調査（第2報）

○田中 直哉^{1,2}, 近藤 澄子² (1. (株) ピノキオファルマ, 2. (株) ピノキオ薬局)

【目的】

モデル・コア・カリキュラム記載項目「薬物治療の実践的能力」に関して、実務実習で学ぶべき内容は、指導薬剤師や実習店舗に任されている。指導薬剤師や実習機関の指導内容の差を少なくし、広分野を網羅することを目的とした、実務実習用アプリを開発し、その有効性について報告した。一般公開化し、指導薬剤師に利用を促したため、アプリを用いた実務実習の利点について調査することとした。

【方法】

医薬品ごとに出題ランキングを作成し、出題時系列順に表示させた。実際に服薬指導する処方に関する出題を投薬前に確認した。「類問を解く」機能により、備蓄のない類薬に関する問題も解けるようにした。また、保険調剤、学校薬剤師、災害時対応など、医薬品の成分と関わらない項目においては、キーワード検索を用いた。

アプリを用いた実習生8名に対してアンケート調査を行った。

【結果】

実習施設による教育格差について、「すごくある」75%、「ある」25%であり、その差は処方箋科目、処方箋枚数、在庫品目数に起因するとの意見が示された。国家試験を意識しながら実習する利点について、「すごくある」75%、「ある」25%であった。指導薬剤師は国家試験の問題を知っておくべきかどうかについて、「はい」100%であった。実習期間の長さについて「短い」50%、「丁度よい」50%であった。店舗にない処方や項目など全分野網羅されていたかについて、「網羅されていた」75%であった。アプリを用いて実習することで、「監査時の注意点を意識でき、そこから出題意図が汲み取れた」、「患者さんに伝えるべき内容を把握できた」といった意見が挙げられた。

【考察】

実習施設による差は処方箋科目、処方箋枚数、在庫品目数に起因するとの意見が示されたが、国家試験アプリを用いることで広範囲網羅されていたと答えた割合が多いことから、実習施設による指導内容の格差を軽減できるツールになりうると思う。

一般演題（ポスター）

2025年11月2日(日) 13:50～14:30 ポスター会場B-11

[P] 一般演題（ポスター） 「教育・研修・実務実習」

[P-161-B] 認知行動療法的アプローチによる服薬支援オンライン型研修プログラムの開発～RIASによるコミュニケーション分析～.

○田沼 和紀^{1,2}, 前田 初代^{2,3}, 原 和夫⁴, 高橋 憲二^{3,5}, 渡邊 文之^{2,3} (1. (株) カメガヤ (フィットケアデポ), 2. CBT-A服薬支援研究会, 3. 日本大学薬学部, 4. (株) わかば, 5. 松戸市立総合医療センター)

【目的】薬剤師が患者に対して認知行動療法的アプローチ（CBT-A）による服薬支援を実施可能とすることを目的としたオンライン型研修プログラムの開発である。

【方法】研修は、二段階（研修1と研修2）で行い、研修1は、CBT-Aをセルフメンタルヘルスに活用できることを、研修2は、患者等に活用できることを目的とした。研修は、オンデマンド動画の受講後、実践を行うオンライン集合研修という形式とした。評価方法は医療コミュニケーション分析方法の1つであるRoter Interaction Analysis System（以下、RIAS）を用いて、発話単位（41項目）に細分化し、さらに「薬に関する“情報提供”、“閉じた質問”、“開いた質問”、“助言・指導”」の4項目、同意に関して、“前のめりの同意”と“納得していない同意”の2項目、及び“相手に気づかせるような投げかけ”と“反証”の2項目を追加し、計49項目で発話数の変化をWilcoxonの符号付順位和検定にて、 $p < 0.05$ を有意差あり、 $p < 0.1$ を有意傾向として評価した。

【結果】薬剤師では“同意”が有意に増加し、“共感”、“開いた質問（生活）”、“開いた質問（心理）”に増加傾向が、“情報提供（薬）”、“閉じた質問（薬）”、“指導（薬）”に減少傾向が見られた。患者では、“相槌”、“同意”が有意に増加し、“情報提供（心理）”に増加傾向、“情報提供（薬）”に減少傾向が見られた。

【考察】研修後に増加傾向から、研修により関係性向上や、薬剤師が考えに注目したアプローチが実践できるようになる可能性が示唆された一方で、増加が期待された“気づかせる投げかけ”及び“反証”には差が見られなかったことから、認知の変容へのアプローチに課題が残ることが示唆された。今後は、実践を重視したフォローアッププログラムや個別フィードバックなどの方法で、より実践が可能となる研修の構築を行いたい。